渋沢栄一物語 Shibusawa Eiichi History

【第10回】

財政改革を推進

慶応元年（一八六五）五月、栄一は、一橋領の各地から農民五百人近くを集めて京都に帰りました。これらの農民は紫野の大徳寺を宿所に訓練を受けましたが、この訓練に栄一が直接携わることはなかったようです。

栄一は、この歩兵取立の仕事を通じて、各地の産物に注目し、これらをもって一橋家の財政改革につながる方策を提言します。

一つは、播州の年貢米について、従来兵庫で売りさばいていたものを、灘や西宮の酒造元に直接販売することで、中間マージンを排除し、より高収益を目指すものでした。

次に、播州木綿について、その売り方を藩札の使用と連動させることでした。現地に藩札と正金の交換所を設け、藩札は一か月前に通知すれば正金に交換することを約束し、まずこの藩札をもって現地で木綿を買い上げ、大坂で販売、その売上代金を大坂の会所においてプールし、藩札と正金の交換期限までの時間差を利用して、資金の運用を図るものです。

どちらも家業の藍玉商売で培った経験を生かした栄一にしかできない提言でした。

▲第15代将軍の徳川慶喜（渋沢史料館提供）
早くからその英明ぶりが期待されていました

一橋家ではこれを受けて、栄一を勘定組頭並に抜てき。栄一は、この年の秋から翌年の春にかけて、各地を巡回しながら業務の遂行に当たりました。

慶応二年（一八六六）三月、その功が認められ、晴れて栄一は勘定組頭に進みます。一方喜作は、すでに軍制所調役組頭に進んでおり、栄一は財政面で、喜作は軍事面で、それぞれ確固たる地位を占めるまでになりました。

同年七月、第十四代将軍家茂が死去し、一橋慶喜が徳川宗家を継ぎ、次いで十二月には第十五代将軍となりました。これにより、かつて挙兵倒幕を企図した身である栄一と喜作は、予想だにしなかった幕臣という立場に立つことになりました。

（文：新井慎一）

物語の手引き

『正金と藩札』

正金は金銀貨幣のことで、藩札は各藩が独自に発行した紙幣です。金銀貨幣は全国で使えるのに対し、藩札の多くはその藩内でしか使用できず、あまり喜ばれませんでした。

栄一の取り組みにより藩札の信頼が増し、領内の金融の便が図られました。

『勘定組頭』

一橋家の財政のトップは、2人の勘定奉行でしたが、実質は、その下の勘定組頭3人が、総勢100人を超える大所帯を取り仕切っていました。

一橋家に仕官した当初、栄一の給与は4石2人扶持（年）と現金4両1分（月）でしたが、約2年で25石7人扶持（年）と現金21両（月）となりました。

※本コーナーの全編を通じて、登場する人物については、歴史上の人物としてその敬称を略します。また、年齢については、当時の通例に従い数え年の表記とします。

キラリ 熱・中・時・間

～プロスノーボーダー　菊池知子さん～

世界を相手に雪面を舞う

今年2月、ノルウェーのオスロで開かれた世界スノーボード選手権。そのスロープスタイル女子に、日本代表として上柴町東在住の菊池知子さんが出場しました。

世界スノーボード選手権は、今年新たに創設された世界最高峰のスノーボードイベントで、今後4年に1度の開催が予定されています。菊池さんが出場したスロープスタイルは、さまざまな形状のジャンプ台や、レール・ボックスなどの人工物が設置されたコースで技を競うもの。２０１４年のソチオリンピックでは、新種目として採用が決まっています。

菊池さんは、平成21年のプロデビュー以来、国内で優勝、海外でも上位に食い込むなど実績を積んできました。しかし、2月15日に実施された予選では、難易度の高いコース設定に苦戦。力を出し切れず予選で涙をのみました。

「自分の総合滑走力のなさを痛感した」と話す彼女は、帰国後、連日練習に没頭します。『滑ること』そのものレベルアップを目指し、練習内容を見直しました。直後に南魚沼市の石打で開催された大会では、他を圧倒し見事優勝。国内プロ戦3連勝を飾りました。

3月末で今季国内戦を終えましたが、世界のレベルに身を置くため、夏にはニュージーランドへ渡り海外戦に挑みます。

「世界で勝ち抜くには今のままではだめです。あらゆるコースに適応できる力を付けないと」

目標を見据えたその言葉は、2年後、ソチでの活躍を期待させてくれます。

▶競技の様子（平成23年7月・フランス）
ボックスと呼ばれる人工物の上部を滑り降りているところ

ありがとうの手紙

最優秀賞
小学校高学年の部
マイケル先生へ

川本北小学校4年（現5年）清水颯人さん

マイケル、楽しく英語を教えてくれてありがとう。マイケルと、英語を話していると、英語なんてちっともむずかしくなくなるんだ。それに、マイケルとするゲームや歌はとても楽しいんだ。僕に英語の楽しさを教えてくれたのはマイケルだよ。でもそれだけじゃない。自分の思いが伝わるよろこびも教えてくれたんだよ。日本語だと言えてあたり前だけど、英語で自分の言いたいことが相手に伝わるとすごくうれしいんだ。サンキュー、これからもよろしくね。

情熱農力

一足早い春を届ける

吉橋 直道さん（20歳・大谷）

深谷が全国トップクラスの出荷量を誇るチューリップ。吉橋さんの家は、それを4代にわたり支えてきました。現在では、35種約34万本を出荷しています。まだ3年目の直道さんは、日々父親の指導を受けながら修行中。市内チューリップ生産の先駆けである『大谷地区』の次代を担う存在です。

「早く父親に追い付き、その上で新しいことにも挑戦したい」その思いを胸に、直道さんは、肌寒い作業場から春を贈り続けます。